

智顓の三観における惑について

NGUYEN TUONG GIANG

【凡例】

『大正新脩大藏經』……大正藏

## はじめに

本論では、天台智顛（五三八―五九七）における三観説を明らかにする一環として、智顛の三観における惑に言及する。三観とは、空・仮・中という三つの実相を観ずる観法である。智顛は『瓔珞経』で説かれる三観に基づいて天台三観の思想を独自に展開する。『瓔珞経』は印度經典から漢訳されたものではなく、五世紀後半に中国で成立した經典だとしている。<sup>(1)</sup>つまり、三観説は中国で成立し、特に天台智顛によって体系化される思想である。三観の形態は、智顛の前期時代の著作である『次第禪門』・『六妙法門』・『小止観』に散見される。<sup>(2)</sup>その後、後期時代の著作にある実践修行法が説かれる『摩訶止観』に三観の内容が詳細に論じられる。智顛の最晩年の著作である、『維摩経』の解釈書『維摩経玄疏』に、三観がはじめて完成な形態で体系化される。<sup>(3)</sup>このような三観の形成過程を見ると、智顛は三観に対して特に重視していることがわかる。

三観は空・仮・中という三諦を観ずる観法であるが、直接に三諦を観ずることではない。この観法は三惑（煩惱）を断じ、三智・五眼を得てから三諦が顕れる実践修行の過程である。従って、三観における惑と断惑を観法の対象として重要な課題だと考える。

智顛の三惑に関して、青木「一九八五」は、「智顛の煩惱論は晩年に至り、三観によって破せられるところの三惑としてまとめられた。」と指摘するが、彼の問題は塵沙無知の惑を根拠としていることである。<sup>(4)</sup>また、煩惱を如何に捉えるかということを研究した高野「二〇〇五」は、『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』という天台三大部が説く

煩惱観と智慧観を考察して吉蔵の思想を比較する。これらの先行研究は三観における惑に触れることが少ない。

本論では、諸法実相の空・仮・中という三諦を観達する際に、智顛が惑についてどのように議論展開しているかを考察したい。惑を理解することで、智顛の煩惱観と三観の実践方法の理論を明らかにすることが可能となる。三観の惑と破惑を明確にするために、『摩訶止観』と『維摩経玄疏』を対象テキストとして、両書の三観の惑を検討し、その両書の三観の相違についてもさらに明確にする。

### 一、『摩訶止観』と『維摩経玄疏』における三観

『摩訶止観』は『法華玄義』・『法華文句』と合わせて天台三大部と呼ばれている。開皇十四年（五九四）荊州玉泉寺で講説された書物で、後期時代著作を代表するものである。智顛の仏教教理と仏教実践修行という天台教観二門において、『摩訶止観』は実践部門に属する著作である。天台の漸次・不定・円頓という三種止観の中は円頓止観に属するものである。この書物は全十大章があるが、第七の後半と後の三大章は不説される。<sup>5)</sup>

『摩訶止観』における三観が詳説される場所は、十大章のうち第七正修行章の陰入境界（十乘観法）にある破法遍である。破法遍とは、遍く諸の法を破すということである。ここで、破すとは、顛倒の迷妄を破すという意味である。教・観行・智慧・理によつて破すことができるが、破法遍で扱える方法は教である。教には三蔵教・通教・別教・円教という四教があるが、ただ不思議円教によつて破す。不思議円教には有（生滅）門・無（無生滅）門・亦有亦無（無量）門・非有非無（無作）門という四門があるが、ただ空無生門によつて破す。無生の教えに依つて止観を修行する

ことを通じて無生法忍に至ることができる。<sup>(6)</sup> 遍く諸法を破すには、豎破・横破・非豎非横破という三つの観点で明かす。三観の所説は無生門の理解を深める豎破法に論じられる。<sup>(7)</sup> つまり、三観は無生の教えを深く理解して偏執・顛倒を破すために論じられる。

『維摩経玄疏』は『十券玄義』（散失本四悉檀義・離出本三観義・四教義）・『維摩経文疏』と合わせて維摩経疏と呼ばれる。智顛の最晩年の開皇十七年（五九七）天台山に智顛自身で『維摩経』の解釈を親撰して晋王広に献上したものである。『維摩経玄疏』は『十券玄義』に基づいて修治・削除したものであるので、両書の内容について基本的にはほぼ同じである。<sup>(8)</sup>

『維摩経玄疏』における三観が体系化される場所は『維摩経』の主人公である維摩詰の名前を別釈する巻第二のなかで体系的に記述している。維摩詰を解釈するのは、第一翻釈名義・第二三観解釈・第三四教分別・第四浄名本迹という四重からなる。三観は第二の三観解釈に述べられる。具体的に言うと、智顛の三観解釈は第一、分別境智・第二、弁三観名・第三、弁三観相・第四、对智眼・第五、成乘義・第六、約断結积浄名義・第七、通此经文という七段を組織し論じる。<sup>(9)</sup>

『摩訶止観』の講説（五九四年）は『維摩経玄疏』の親撰（五九五年）より先に成立したので、『維摩経玄疏』の中に、三観が体系されるのは『止観』の三観から受けることは当然なことであろう。両書の成立はほぼ一年間で、三観所論の内容と形態は相違があるかどうか、その問題を考察しなければならぬ。<sup>(10)</sup>

## 二、三観における惑

三観とは、三諦の理を顕す観法であり、その三諦の理を迷えば苦しみを生む原因になる。衆生には多くの顛倒があり、その顛倒を対治するために迷いを破しなければならない。<sup>11)</sup> 智顛は三観解釈の中に、この迷に対して見思惑・塵沙無知惑・無明惑という三惑を分ける。具体的に言うと、第一の従仮入空観（空観）に見思惑を断じ、第二の従空入仮観（仮観）に塵沙無知惑を断じ、第三の中道第一義諦観に無明惑を断ずることである。

この三観は、実に一心にあるが、法の妙理は難しいので、三つの観を次第に解釈して一実諦を顕すことにする。<sup>12)</sup> また、三観は因縁所生の三諦の理を観じて理相が別にして不同である。取相の塵沙・無明という三種惑障の麁細と階級は異なることがある。<sup>13)</sup> そのため、利根の円教の人は、一念心に三観を即空即仮即中という円融相即に観じ、これは一心三観と呼ばれ、三蔵教・通教・別教の菩薩は三観を歴別次第に観じるので次第三観・別相三観と呼ばれる。次第・別相三観と一心三観という観法の形式によって所観の惑も同じではない。

### (1) 次第・別相三観の見思惑

まず、次第・別相三観における惑を検討していく。『摩訶止観』の豎破法遍の空無生門に依って遍く法を破す際に、従仮入空観は、先に見仮・次の思仮より空に入ることである。<sup>14)</sup> 見仮と思仮は見惑と思惑であり、因縁よって仮りに生じ本質不実である。見惑とは次に説く。

見惑は体に附してしかも生じ、還つてよく体を障ぐ。(中略) この惑が除かざれば体は顕れることを得ず。しかるに見は即ち理を見れば、実を見れば惑にあらざり、理を見る時よくこの惑を断ず、解に従つて名を得て、名づけて見惑となすのみ。(大正蔵四六、六二中)

見惑とは、理(体)より生じ、また理を損なうものである。見惑が除かざれば理も顕さないが、目覚めして理を見れば眞実を見ればもはや迷わない。見理断惑という理解によつて見惑というのである。また、見惑には次の四種がある。

見惑に四つあり、一つには単の四見、二つには複の四見、三つには具足の四見、四つには無言の四見なり。単の四見は、有を執し、無を執し、亦有亦無を執し、非有非無を執するなり。(中略) 複の四見は、謂く有の有、有の無、無の有、無の無、亦有の有無、亦無の有無、非有の有無、非無の有無なり。これはこれ複の四見なり。(中略) 具足の四見は、有の見に四を具するは、謂く有の有、有の無、有の亦有亦無、有の非有非無なり。無に四を具するは、無の有、無の無、無の亦有亦無、無の非有非無なり。亦有亦無に四を具するは、亦有亦無の有、亦有亦無の無、亦有亦無の亦有亦無、亦有亦無の非有非無なり。非有非無に四を具するは、非有非無の有、非有非無の無、非有非無の亦有亦無、非有非無の非有非無なり。これを具足の四見と名づく。(中略) 絶言の見は、単の四見の外に一の絶言の見、複の四句の外に一の絶言の見、具足の四句の外に一の絶言の見あり。(大正蔵四六、六二中～六二下)

引用したように、見惑は四種がある。それは、単一に生ずる四種の見、複合して生ずる四種の見、具足して生ずる四種の見、無言の四種の見という四種がある。引用文を述べないが、四種の四見にそれぞれに八十八使（煩惱）を備え、このように六十二見のそれぞれに百八種の煩惱などが備わるのである。これらの諸見は外道の見であるが、仏教においても三藏教・通教・別教・円教によって四見を生じて、それぞれの見の中で八十八種の煩惱を起し、六十二見のそれぞれに百八種の煩惱が備わるのである。<sup>15)</sup> 以上のように、四種の四見から、一つの見に八十八使を起し、六二見にも八八使・一〇八種の煩惱が生じる。種々の見から種々の惑（煩惱）を生じることがわかる。

次に、思惑について検討すると、『摩訶止観』の無生門破法遍の思仮より空に入るのには次のように記述される。

思仮とは、謂く貪・瞋・痴・慢なり。これを鈍使と名づけ、また正の三毒と名づく。三界を歴て十となす、また三界の凡そ九地に約して、地地に九品があれば、合して八一品なり。みなよく業を潤し三界の生を受く。（中略）故に正煩惱と称するなり。見惑が爛漫として方なく、境に触れて著を生ずるに同じからず。思惟と称するは、解に従つて名を得る。初めは真を観すること浅ければなお事障あるも、後に真を重慮してこの惑が即ち除くがゆえに思惟の惑と名づけるなり。（大正蔵四十六、七〇上）

思仮とは、貪・瞋・痴・慢などの思惑であり、鈍使または正三毒と呼ばれる。見惑と同じなく、より重い煩惱である。思惑は三界中に九地と九品を合して八一品がある。また、真実を重く思惟して思惑を除くので、思惟惑とも言われる。三観における見思惑の所説について、智顛は『阿毘曇論』や『情実論』に基づいて参照することである。<sup>16)</sup> 青木

「二九八五」は見惑・思惑は『勝鬘經』一乗章が説く四住地の惑と同様とされると言及する。また、見惑・思惑は見諦道及び思惟道で断ぜられる惑であり、それらの見諦道と思諦道は『阿毘曇心論』にあり、見道と思道は『雜阿毘曇心論』『阿毘曇心論經』にあると示す。そして、智顛の煩惱論に基本的には『阿毘曇心論』と『勝鬘經』に依っていると指摘している。<sup>17)</sup>

『摩訶止観』は從仮入空觀に見惑と思惑という煩惱を対象として空を觀するが、『維摩經玄疏』の從仮入空觀の中には、智顛が思仮を使わずに愛仮を用いることである。それが以下に記述される。

一つに、所觀の仮を明かさば二種の仮あり、一切法を撰す。一つには愛仮、二つには見仮なり。愛とは、即ち愛論なり。見とは即ち見論なり。此の二種はみなこれ戲論にして、慧眼を破し、眞實を見るを障ぐ。愛論は所見の境に随つて、即ち愛著を生ず。是れは魔業なり。見論は所見の境に随つて、即ち分別を生ず。是れは外道なり。(中略) いわゆる、此の愛見に因り、九十八使を起し、三業をして善・不善を作さしむ。即ち六趣に輪轉して生死の苦を受く。(大正藏三八、五二五下―五二六上)

『維摩經玄疏』の從仮入空觀には、愛仮と見仮を取り上げて煩惱を示す。愛仮は愛論・愛著・魔業であり、見仮は見論・分別・外道であることが論じるが、『維摩經玄疏』は經典の解釈に符合するため愛仮を用いる。実はここにとく愛見仮とは、『摩訶止観』に説く見惑と思惑の内容と同様であろう。また、上述したように、『摩訶止観』にある思惑は鈍使であるとされて、『維摩經玄疏』には「鈍使は鹿にして愛・魔業に屬す。」<sup>18)</sup>と説くので、愛仮と思仮の意味は同じだ

と考える。

以上、三観の従仮入空観における見思惑についてまとめると、『摩訶止観』には、見惑と思惑を取り上げて空観の対象とする。一方、『維摩經玄疏』には、思惑を替えて愛著を用いることである。また、智顛は『勝鬘經』『雜阿毘曇心論』『阿毘曇心論經』などに基づいて見思惑を論じると青木が指摘している。さらに、智顛は両書における三観の惑に対しては、『摩訶止観』の方がより詳細に述べ、『維摩經玄疏』の方が略述するものである。

(2) 次第・別相三観の塵沙無知惑

塵沙無知惑は言うまでもなく一般的な三惑の一つであるが、『摩訶止観』と『維摩經玄疏』の三観所説にはその言葉がない。青木「一九八五」は『摩訶止観』の破法遍に、見思惑と無明惑について詳しく説かれるが、塵沙惑についてはほとんど言及されることがないと指摘する。<sup>19)</sup>ただし、塵沙無知という言葉は『摩訶止観』の第九卷には一ヶ所に記される。<sup>20)</sup>では、智顛は三観の塵沙無知惑に対して両書の中に論じるかを調べていく。

塵沙無知惑は三観の従空入仮観の所に説かれる。菩薩が空と非空(仮・妙有)を知って空涅槃の境界に住せず俗に戻って衆生を救済することである。<sup>21)</sup>つまり、菩薩は空に入るのは自分の縛著(煩惱)を破し、仮に入るのは衆生の縛著を破させることである。<sup>22)</sup>しかし、衆生の機根は高低不同であり、煩惱の病数が塵沙のように無量無数であるので、その煩惱の病を対治方法(薬)を知らなければ(無知)衆生を救済することができない。塵沙の病はすなわち見思の病(惑)である。その見思病数について『摩訶止観』には、次に詳細に記述している。

いかんが見の重数の多少を知るや。一の有の見より三偈を派出し、また三偈より四句を派出し、三偈を合わせて十二句なり。また四句より四悉檀を出だし、十二句を合わせて四八の悉檀なり。また一の悉檀より性空・相空を派出し、四八の悉檀を合わせて九六の性・相の空あり。一一の句におのおの止観あり、合わせて一九二句の止観なり。前の根本について都て合わせて三四八句なり。これは信行の人についてのごとし、法行の人もまたのごとし、信行が転じて法行となるもまたのごとし、法行が転じて信行となるもまたのごとし。四人について合わせて一三九二句あり。これは一の有の見に約してのごとし、無の見もまたのごとし、亦有亦無の見もまたのごとし、非有非無の見もまたのごとし。四見について五五六八句あり。これは単の四見についてのごとし、復の四見もまたのごとし、具足の四見もまたのごとし。三種の四見について合わせて一六七〇四句あり。不可説（絶言）の見も、初めの有の見のごとし、ただ一三九二句あり、これ則ち合わせて一八〇九六句あり。これはこれ所破にしてのごとし。能破もまたのごとし。能・所を合わせて論ずれば、則ち三六一九二句あり。自行はのごとし、化他もまたのごとし。自行・化他都て合わせて七三三八四句あり。もしさらに六二見、八八使に約して三偈・四句等を論ずれば、則ち無量無辺にして窮尽すべからざるものあり。病相は無量なり、菩薩は悉く知る。（大正藏四六、七六中下）

まとめて言うと、一見は七三三八四句があり、六二種の見や八八種の煩惱について、三偈と四句によって論じると、その数は無量無辺のものとなり、数えあげることにはできないであろう。このように病相は無量であるが、菩薩は悉く知るわけである。もし菩薩はこのような塵沙の見病が無知すれば衆生の救済が障碍されるとなる。見惑の病相はその

無量であるが、思惑の病相も次のように無量である。

思の病の重数を知ることが明かす。(中略) 重数は、九地に則ち八一品あり。初めの一品に三仮あり、四句の止観あり、三仮を合わせて十二句なり。一句に即ち信解と見得あり、おのおのに四悉檀を用い、信・法におのおの八つあり、合わせれば則ち十六番なり。此の信・法は互いに転ずる義あり、また十六となる。前と合わせれば則ち三三句なり、一句は既に三三句あり、三三句の三仮は合わせて十二句あれば、則ち三八四句あり。一一の句にまた性・相の空あり、則ち合わせて七六八句あり。前に足せば合わせて一一五二句となる。根本を含めて合わせれば一一六四句となる。一品はこのごとし、九品を合わせれば一〇四七六句あり、欲界の九品はこのごとし、三界の九品を合わせれば九四二八四句あり。所破はこのごとし、能破もまたしかる。能・所を合わせれば一八八五六八句あり。自行はこのごとし、化他もまたしかり、合わせれば三七七一三六句の止観あり。もし細かく論ずれば一一の品にまた無量の品あり。(大正藏四六、七六下〜七七上)

以上の通り、『摩訶止観』の三観の従仮入空観にある見思という病を知ることについて検討した。菩薩は自ら見思惑を破してから空涅槃に入ることができる。しかし、菩薩は慈悲心があり、世間の衆生の煩惱を破して解脱させようとする。衆生の煩惱は塵沙のよに無量無辺であり、菩薩はもし無知すればその菩薩道が障碍されるとなる。これは塵沙無知惑である。

塵沙無知という言葉は『摩訶止観』の三観の従空入仮観においては記さないが、『維摩経玄疏』の三観の従空入仮

観の中に、「この観は正しく俗諦を観じて塵沙無知を破すため。」と明確に述べる。しかし、智顛が塵沙無知惑に対しては次のように簡潔にこう説いている。

一には、見仮の一切法に入るを明かすとは、菩薩は深い禪定に住し、空・非空を知り、大いなる慈悲を具し、仮を観じて仮を見る。仮に四種あり。此の四見より無量の見を出す。一つに自生の見、二つに他生の見、三つに共生の見、四つに無因生の見なり。この四見はおのおの執諍の病あるなり。(中略)次に、愛仮の一切法に入るを明かすと知るべし。(大正蔵三八、五二七下―五二八上)

引用したように、『維摩教玄疏』の從空入仮観における塵沙無知惑とする見愛仮を概略に著す。すなわち、見を四句によつて仮であり、四見より執著の病を生じることである。愛もまたそのように知ると省略する。

塵沙無知惑についてまとめて言うと、その惑の自体がなくて衆生の見思惑または愛見惑という他縛は塵沙のように無量無辺がある。塵沙無知惑が衆生救済という菩薩道を障碍するので、菩薩が無量の仏法を知らなければならず善く巧みに対治する。塵沙無知は『摩訶止観』にその用語がほとんど使われないが、第九卷に一回のみ言及される。一方、『維摩経玄疏』に塵沙無知は三観の中に述べるが、その内容は『摩訶止観』より結構に省略されることを明らかにした。

(3) 次第・別相三観の無明惑

無明惑は三惑の一つであり、三観の中道第一義諦観によつて無明惑を破すことができる。『摩訶止観』にこの中観

を實踐することは正しく無明を破すことであると述べる。<sup>23</sup> 無明という惑は中道第一義諦觀の修中觀について次のように説く。

今、無明を觀ずるもまたまたこのごとし。二觀の智を觀ずるに、彼れが惑を破すに当たつてこれを名づけて智となすも、今、中道に望むれば、智は還つて惑となり、この惑はこれ中智の家の障なるがゆえに智障という。また、この智は中智を障えて中智を發さざるがゆえに智障と名づく。(中略) また、能障はこれ惑なり、所障はこれ中智なり、能・所を合わせて論ずるがゆえに智障という。(大正藏四六、八一下)

ここに言うと、空觀によつて得る一切智と仮觀によつて得る道種智という二種の智は、中道において惑になり、中道の智を障碍するので智障と呼ばれる。この二智について『摩訶止觀』第卷三に記す。

三觀は、從仮入空のごときは、空慧が相応して、即ちよく見思の惑を破し、一切智を成じ、智は能く体を得て、真の体を得るなり。從空入仮のごときは、業と病の種種の法門を分別し、すなわち無知を破して道種智を成じ、智は能く体を得て、俗の体を得るなり。もし双つながら二辺を遮して中に入る方便と為せば、能く無明を破し、一切種智を成じ、智は能く体を得て、中道の体を得るなり。(大正藏四六、二五下～二六上)

引用したように、見思の惑を除いて一切智を成就し、塵沙無知の惑を除いて道種智を成就し、無明の惑を除いて一切

種智を成就する。中道第一義を観ずる際に、前の二観を方便としてその二観を双妄双照にして中道正観に入ることである。前二観は方便観として正観ではなく、換言すれば、その二観が中道第一義諦に入ることと障碍して無明の惑となることであろう。

無明惑は『維摩經玄疏』には、『摩訶止観』の二観の二智は無明の惑となることのように説かないが、二観を方便観とし智障などに言及される。『維摩經玄疏』に次に説かれる。

一つに、所観の境を明かすとは、前の二観は是れ方便なり。二諦を照らすの智ありと雖も、未だ無明を破さず、中道を見ず、真俗を別に照す。即ち是れ智障なり。(大正蔵三八、五二八上)

『維摩經玄疏』には、二諦を照らす二智が中道正観に入ることと障碍することを示し、ただし真諦と俗諦を別々に二智を得るので、智障となり無明惑を破すことができないと述べる。

両書の無明惑については、智顛が基本的に二観を方便観として、二観から得る二智は中道正観に入ることと障碍しない、あるいは無明惑が未だ破されないという内容は同様であると明らかにした。

以上に、両書に三観を次第・別相という形式によって思見・塵沙無知・無明という惑(煩惱)を検討した。見思惑は間違ふ分別思惟であり、塵沙無知惑は塵沙のような無量無辺の仏法の無知であり、無明は智障であるそれぞれの煩惱が三界六道に輪廻して、苦痛生死を受ける原因である。そして三観とはその三惑を対象としてその惑が三仮・四句によって空・仮・中という実相を次第に観じる三つの観法であると明らかにした。

次第・別相三観は次第に別々に三惑を観破するので、惑を詳細に論じるが、円融相即の一心三観には惑に対してどのように観るか、次に検討してみる。

(4) 一心三観の惑

一心三観とは、無明一念因縁所生の法は即空・即仮・即中にして不可思議の三諦であるので、一念心の中に円融三諦があれば、一念心の中に三観もある。一念心に三諦を具足し、一観を体達すれば、この観に三観も具足する。<sup>24</sup>つまり、次第・別相三観において、見思・塵沙無知・無明という三惑を次第に破してから空・仮・中という三諦が別々に顕される。一心三観は三諦・三智が一念心にあるので、次第に観じる必要がない。では、一念心にどのように三観を實踐するか、または三惑がどのように論じられるか、『摩訶止観』に次のような記述がある。

もし前来の横豎の諸説を得ざればこのごとき境・智を何に由つて解すべきや。(中略)

前には諸法はみな三仮の四句あり、句句に実を求めるも不可得にして、単・複の諸見もみな空なり、九地の諸思もみな空なり、十六門もみな空なることを説き、先にすでに聞くゆえに、今は一心は即ちこれ空なりと聞けば、懸かに前来の次第の諸空を超え、懸かに不可思議の畢竟の妙空を識るなり。

前来に明かす所の諸の仮は覆疎し倒入し、葉・病・授葉等の法を分別することを先にすでに聞くゆえに、今は一心は即ち仮なりと聞けば、懸かに前来の次第の仮を超え、懸かに双照の二諦の仮を識るなり。

今は非空非仮を聞けば、懸かに前来の諸の空はみな空にあらず、諸の仮はみな仮にみな仮にあらざるに超え、ま

た前来の一切の非有非無、単の見の中の非有非無、複の見の中の非有非無、具足の中の非有非無、三蔵の中の非有非無、通門の非有非無、別門の非有非無を分別すると、前にすでに聞くがゆえに、今は非有非無を聞けば、懸かに前来の諸の非有非無を超えて、懸かに中道不可思議の非有非無を識なり。(大正蔵四六、八四下)

もし次第・別相三観をまだ理解していなければ、一心三観という観法を理解することができない。だから、次第・別相三観によって諸法は空・仮・中であると聞けば、今の一心三観に思議の空・仮・中を超えて不可思議の空・仮・中を理解することができる。

一心三観には三惑を直接の対象としないが、次第・別相三観の三諦を得なければ、一心三観を理解できない。そのため、一心三観と次第・別相三観との関係があるので、一心三観は三惑と関係しないことではなからう。また、一心三観に無明の一念心から生じる諸法なので、ここに言う無明は無明惑と同様のものであるか、筆者はまだ明確していない。

『維摩経玄疏』の一心三観は『摩訶止観』に説く無明一念心の所生法は非空非仮または空・仮であるということと同じであるが、次第・別相三観との関係などと述べない。それが次のように記される。

若しは此の一念無明の心を観ずれば、非空非仮、一切の諸法もまた非空仮なり。而も能く心の空仮を知り、即ち一切法の空仮を照す。是れは則ち一心三観は円かに三諦の理を照す。(大正蔵三八、五二九上)

以上の通り、『摩訶止観』と『維摩経玄疏』の一心三観において惑を検討した。両書には、直接に見思・塵沙無知・無明という三惑を論じない。しかし、『摩訶止観』に次第・別相三観の諸説を得なければ一心三観を理解することができないと述べるので、三惑と間接的に関連すると考えている。

### おわりに

本論では、『摩訶止観』と『維摩経玄疏』に説く三観の惑に言及した。智顛は三観について、『摩訶止観』に次第三観と一心三観に分け、『維摩経玄疏』に別相三観と一心三観に分ける。三観は『維摩経玄疏』にはじめて体系化されるが、その三観の詳細の内容は『摩訶止観』より相当に省略される。そのために、三観の惑は『維摩経玄疏』より『摩訶止観』の方が詳しく論じられる。

三観の惑は煩惱として諸法実相の三諦を見ることを障碍するものである。次第・別相三観は三観を次第に別々に観じることである。具体的に言うに従仮入空観で空観にして見思惑を、従空入仮観で仮観にして塵沙無知惑を、中道第一義諦観で中観にして無明惑を破すという三惑の内容を明らかにした。一心三観は無明一念の心に同時に三諦を見えるので、一観すれば他の二観も同時に実践する。『摩訶止観』と『維摩経玄疏』の両書は違い經典を解釈するため、文量・位置づけと役割は相違がある。しかし、両書の三観の惑の内容が同様であるとわかった。

三観説を明らかにする際に、三惑と密接な関係があるという問題を意識しながら研究している。また、智顛は惑（煩惱）に関しては他の論師の思想の影響を受けるかどうか、という問題を検討すれば智顛の三観もさらに理解できると

考えている。

【参考文献】

青木隆

・「一九八五」「天台智顛における三惑について」『印度学仏教学研究』 $\infty$ 「卷」号、一九〇—一九三頁

佐藤哲英

・「一九六二」『天台大師の研究』（百華苑）

・「一九七五」『三観思想の起源及び發達』関口真大編『止観の研究』（岩波書店）

高野淳一

・「二〇〇五」『煩惱を如何に捉えるか—吉蔵と天台三大部の煩惱観・智慧観—』『集刊東洋学』九三卷、六一—九〇頁

注

(1) 佐藤「一九六一」六六九頁参照。

(2) 佐藤「一九七五」二二八頁参照。

(3) 佐藤「一九六一」四一六頁参照。

(4) 青木「一九八五」一九〇頁参照。

(5) 佐藤「一九六一」三六四頁参照。

(6) 大正蔵四六、五九下

(7) 大正蔵四六、六二上

(8) 佐藤「一九六一」四一六頁参照。

(9) 大正蔵三八、五二五上

- (10) 佐藤「一九六一」三六四頁参照。
- (11) 但眾生多顛倒少不顛倒。破顛倒令不顛倒。故言破法遍耳。(大正藏四六、五九中)
- (12) 如此三觀實在一心。法妙難解寄三以顯一耳。(大正藏四六、六一上)
- (13) 觀因緣所生三諦之理。相別不同。取相恒沙無明三種惑障。細階級有異。觀理破惑用智不同。故名別相三觀也。(大正藏三八、五二五下)
- (14) 先從見假入空。次從思假入空。(大正藏四六、六二中)
- (15) 如是等約外道法生如是等見也。又約佛法生見者。三藏四門生四見。通教四門生四見。別教四門生四見。圓教四門生四見。又一種四門外。各有絕言見。如是一一見中。各各起八十八使六十二見百八等惑。如前說。(大正藏四六、六三上)
- (16) 若欲委知毘曇成論備悉明之。可往彼尋。(大正藏四十六、七〇上)
- (17) 青木「一九八五」一九〇頁参照。
- (18) 大正藏三八、五二六中
- (19) 青木「一九八五」一九一頁参照。
- (20) 破法遍は、(中略) 豎に破せば、十界の行・有の見思・塵沙無知・無明は不生、ないし四二品の不生不生なるを大涅槃と名づく。(大正藏四六、二二七中)
- (21) 大正藏四六、七五下
- (22) 大正藏四六、七五下
- (23) 大正藏四六、八一上
- (24) 大正藏四六、八四中
- (25) 大正藏四六、八四下